

〈研究ノート〉

イスラームの特徴と初期イスラームの歴史

岩木 秀樹

The Characters of Islam in the Early History of Islam

IWAKI Hideki

はじめに

本稿では、イスラームの基本的な特徴とムハンマド亡き後の正統カリフや諸王朝の歴史を概観する。

まずイスラームの基本である六信五行やイスラームの特徴を説明し、商業的雰囲気の中でイスラームが培われたこと、さらにイスラーム・ネットワークを構築し得た要因を考察する。次にカリフの意味や条件を述べた上で、四代正統カリフやその後の諸王朝の歴史を概説する。

1. 六信五行

イスラームの基本は、六信五行に集約されている。六信とは、信ずるべき六項目であり、アッラー・天使・啓典・預言者・来世・運命（予定）である。五行は五柱とも呼ばれ、行われるべき五項目であり、信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼である。

まず六信について、アッラーとは世界の創造主で唯一絶対の存在である。天使（マラーイカ）はアッラーと人間との間を仲介する超自然的存在である。

啓典（クトゥブ）はアッラーからくだされた啓示を記録したもので、モーセ五書や福音書なども啓典とされているが、コーランが最後にして最良の啓典とされている。預言者（ナビー）はアッラーの言葉を預かった人物であり、アダム（アーダム）・ノア（ヌーフ）・アブラハム（イブラヒーム）・モーセ（ムーサー）・イエス（イーサー）などで、最後にして最大の預言者がムハンマドである。アッラーによって創造され、最後の審判の時まで続くのが現世であり、最後の審判の後、生前の行いによって天国か地獄かが決められ、そこで永遠の時間を送るのが来世（アーヒラ）である。運命（カダル）とは、被造物は全て創造主によってその運命が決められているという考え方である。ただし自由意志の存在や人間の主体的な社会変革能力を強調する学者もいる。

次に五行について、信仰告白（シャハーダ）とは「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒である」というアラビア語の定型句を唱えることである。異教徒がイスラームに改宗する場合のみならず、ムスリムも日頃からこの句を唱えている。礼拝（サラート）は一日5回実践するものであり、金曜の正午過ぎの礼拝はモスクにおいて集団でやった方がよいとされている。喜捨（ザカート）は財産に一定の支払いが課せられるもので、貧者への施しともなり、社会における富の再分配の制度である。断食（サウム）はイスラーム暦第9の月に日中、飲食を絶つことをはじめ禁欲生活を守ることである。ただ日没後は普段以上のご馳走を食べる習慣がある。巡礼（ハッジ）とはイスラーム暦第12の月にメッカに巡礼することである。これは身体的・経済的条件に恵まれた者にのみ課せられた義務である（大塚 2002:393-394）。

2. イスラームの特徴

加藤によれば（加藤 1999:24-35）、イスラームの特徴は次のようにまとめられる。

イスラームは7世紀に生まれた若い、活力に満ちた宗教であり、仏教・ユダヤ教・キリスト教に比べれば新しい宗教である。

歴史のほとんどにおいて、征服者、勝利者でありつづけ、キリスト教が時の支配者から差別と迫害を受け、地下に潜るような苦しい殉教の時代を経験

したのとは対照的である。この事実が、イスラームを世俗と歴史に対して肯定的な宗教とした。実際、多くの宗教がユートピアを伝説あるいはあの世に求めるのに対して、イスラームは歴史の一時期、すなわち預言者ムハンマドの生きた初期イスラームをユートピアとしている。

聖と俗の一致や、宗教の領域と政治の領域は分離されてはならないというイスラーム的世界観が存在する。イスラーム教徒は俗からの離脱に聖を見るのではなく、俗の中に聖を見るのである。したがって禁欲を説くような独身の聖職者や出家僧の存在はないのである。さらに、塩尻によれば（塩尻 2007:50）、現世や日常生活がイスラームにおいては重要なのである。宗教的に神に最も喜ばれる人間の生き方は、世間を外れて出家したり、修道院に入ったり、一生独身で過ごしたりすることではなく、世間の中で日常生活を普通にしながら伴侶を得て結婚をし、子供を生み育て、そして次の世代を世の中に送り出して年老いて一生を終わるという生き方である。つまり人間として、生物的にも社会的にも、当たり前の普通の生き方が神にとって最も喜ばれる生き方であると考えられている。

一人一人のイスラーム教徒にとって、神は直接向き合う存在であり、神との間を仲裁する教会や聖職者などの権威は理念上存在しない。それゆえ全ての信徒は神の前で平等であり、徹底した個人主義、契約主義、平等主義が特徴となる。

教義はシンプルであり、秘蹟・ミラクルの少ない合理的な宗教とされる。イスラームの合理的な性格は、イスラーム世界を穢れの観念の薄い世界とした。その端的な表れが卑賤の少ない職業観であり、カースト制度を持つインドとは対照的である。

また宗教実践の原則においては厳格で、適応においては柔軟であり、断食における例外の存在などがそれにあたる。

イスラームの特徴及び拡大理由として、塩尻は以下のように述べている（塩尻 2007:7-8）。第一に、イスラームの支配が当時のビザンティンの支配に比べて政治的な抑圧が少なく、税も低かったこと。第二に、信教の自由をある程度認めており、宗派間の論争には関与しなかったので、中東地域のキリスト教徒がイスラーム支配を支持したこと。第三に、血縁主義や部族主義

を打破して、人種・国籍・身分に関わらず、あらゆる人間は全知全能の神の前では絶対的に平等であるとしたこと。第四に、基本的教義を崩しさえしなければ、大幅な土着化が許されていたことである。

3. イスラームにおける環境と商業

イスラーム世界の生態的環境は規模、形態、植生を異にする砂漠オアシス複合体が点々と立地する空間であり、砂漠オアシス商業システムとでも呼べる商人の活動を介して形成される経済システムが形成されていた。このようなイスラーム世界の特徴として、次の二点が指摘できる（加藤 1995:39-40,51）。第一に、農業、遊牧・牧畜業、商工業の分業システムにおいて、遊牧・牧畜業の占める重要性が他の世界に比べて相対的に高いのである。第二に、そこでの市場圏がそれ自体一つの完結した閉鎖的経済圏を形成することなく、都市を結節点として、様々な規模の交易圏と重層的に結びつくことによって、広く対外的に開かれていた。

この地域は、流動性や国際性が高い地域であるが故に、排他的な領域志向が弱く、コスモポリタンの思考様式が醸成された。イスラーム社会の繁栄は国際交易に大きく依存していたが、この事実は歴史的事件に左右されやすいという構造的脆弱さを持っていたことも意味していた。

このような流動性、国際性ととともに商業精神もイスラームを寛容にさせた要因である。

板垣によれば（板垣 1986:6）、ムハンマドは国際商業都市メッカの商人であり、血縁の絆によって生活する砂漠の民の宗教性には常に不信の念を抱いていた。イスラームの倫理は、明らかに商取引の契約を重んずる商人の道德観の反映であった。多くの宗教では商業を忌み嫌う傾向があるのに対して、イスラームにおいては公正・平等な商業はむしろ推奨されているのである。

イスラームは商業的倫理観や雰囲気の中で培われ、ムハンマドをはじめ多くの教友たちも商人であった。したがって、イスラームは商業、商人に対して肯定的であり、次のようにコーランにも教えを商業用語で命じている。

「コーランを読誦し、礼拝の務めをよく守り、神から授かった財産を惜し

みなく使う人々は、絶対はずれっこない商売を狙っているようなもの（コーラン 35 章, 26 節）。」「神の御導きを売り飛ばして迷妄を買い込んだ人々、だがかれらもこの商売で損をした。目算どおりにいかなかった（コーラン 2 章, 15 節）。」

商業は身内や小さな集団内で行っていても大きな利益は得られない。他集団が存在してこそ、莫大な利益が得られるのである。商業的倫理観の基底には、他者の存在が前提となっているのである。また他者から暴利をむさぼると、一時自分は得をするが、相手は経済的に疲弊してしまい、長期的に通商関係を結べなくなってしまう。自分とともに他者も潤い、ウィンウィンの関係によってこそ、自分も長期的な利潤を得られるのである。後にオスマン帝国などの大商業帝国が誕生したのも、このような商業的寛容性があったからである。

4. イスラーム・ネットワーク

13・4 世紀にはパクス・モンゴリカの世界とイスラーム世界とが相互に交流を深めて、ユーラシアとアフリカの諸地域を広く覆う国際的な交通システムとしてのイスラーム・ネットワークが成立した。

イスラーム・ネットワークをまとめ上げた要因として、ラクダとダウ船による海陸の連関する交通システムとイスラーム都市の発展、また文化要素としてイスラーム、共通のコミュニケーション手段としてのアラビア語、国際法としてのイスラーム法、中東地域を中心として古くから発達した契約を重視する商人文化や多文化共存の思想などがあった。

イスラーム世界にはイブン・バトゥータだけでなく、他者との交流を求めて移動・遍歴する多くの人々がいたのである。移動する異人・客人たちを柔軟に受け入れるコスモポリタンなイスラーム世界があり、同時に躍動する壮大なイスラーム世界の人と人をつなぐ情報ネットワークがあったのである。イスラームでは旅人は神によって数々の恩寵が与えられ、貧者、病人、孤児とともに保護されるべき対象であった。

また公式には教団組織や宣教制度をもたないイスラームがアフリカの奥地

や、中央アジア、遠く東南アジアまで伝播したのは、イスラーム神秘主義集団の地道な草の根的活動によるものである。彼らは到着した場所で、小さな道場を建設し、現地の人々にアラビア語の読み書きを教え、薬草学の知識を活用して病人の手当てなどを行い、現地の人々の信頼を勝ち取っていったものと思われる。そうして各地に建設された修行場が国際商業活動のネットワークを形成していったのである。土着の伝統や文化を抵抗なく取り込んでいったために、各地への伝播が促進された（塩尻 2007:24）。

中東社会に生まれたイスラームとその社会もこうした中東的移動文化の性格を色濃く帯びており、商人・職人・知識人・巡礼者・修行者・遊牧民などの移動の民が中心となって、狭い地域とか国といった枠を越えて、広域的な情報交流と文化的コミュニケーションのネットワークを作り上げたのである（矢島 2003:10-20,43）。このように移動の民は、線引き思考や排他意識は弱く、他者・異人・客人たちをもてなすホスピタリティの厚い人々であり、それが寛容性にもつながったのである。

5. カリフの条件と四代正統カリフ

ムハンマドは632年に死去したが、後継者を指名しないまま死んだために様々の問題が起こることになった（Ünlü 2014:81）。第1代カリフ、アブー・バクル（在位632-634）、第2代ウマル（在位634-644、ペルシア人奴隸によって殺害）、第3代ウスマーン（在位644-656、ムスリム過激派によって殺害）第4代アリー（在位656-661、ハワリージュ派によって殺害）の4名までは正統カリフと呼ばれ、ムハンマドの後継者である（塩尻 2007:34）。

ムハンマドは神の言葉を預かる預言者としての宗教的な権限と、ムスリムの集合体であるウンマを統率する政治的な権限を合わせ持っていた。この2つの権限のうち、カリフが第2の政治的権限だけを継承したのである。コーランの解釈やイスラーム法の体系化、裁判権の行使などは、国家の主権者であるカリフではなく、イスラーム諸学を修めたウラマーに委ねられた。

四代の正統カリフは信者と親しく交わるいわば仲間内のリーダーであった。それに対してその後にウマイヤ朝（661-750年）をたてたムアーウィアは帳

をおろした玉座に座り、警護の役人をおいて、臣下を容易に近づけないようにした。

カリフは次のような7つの条件を満たしていなければならない。①公正さ、②法的判断をくだすことのできる知識、③視覚・聴覚などの健全な五感、④立ち振る舞いの正常さ、⑤公益増進の政策意欲、⑥敵と戦う勇氣と気概、⑦クライシュ族の出身者であること、である（佐藤 2004:18,26,46）。

四代の正統カリフは、いずれもムハンマドの高弟たちであり、メッカ時代の初期からムハンマドに従い、メディナでのイスラーム共同体形成にも深く関わった。ムハンマドとの関係の深さも、第1代のアブー・バクル、第2代のウマルはそれぞれ娘がムハンマドの妻となって舅にあたり、第3代のウスマーンはムハンマドの娘2人を妻としていたことによく示されている。第4代のアリーはもともと年若い従弟であり、ムハンマドに実子同然に育てられ、ムハンマドの末娘ファティマと結婚した（小杉 2011:17）。

632年のムハンマドが没したその日のうちに、アブー・バクルが第1代カリフに選ばれた。彼はこのときおよそ60歳であり、アリーは30歳代半ばであった。アブー・バクルはムハンマド生前から共同体の長老であり、ムハンマド自身がしばしば彼に相談をしていたのである。

イスラーム共同体の分裂という第1の危機は、アブー・バクルによって回避できた。しかし第2の危機はアラビア半島の諸部族の離反であった。ムハンマドの死後、後継者に同じように税を支払うつもりはないと主張したのである。アブー・バクルらはこれを「リッダ（背教）」とし、神への反逆であるとして戦い、共同体の再統合に成功したのであった（小杉 2006:146-149、Esposito 1999=2005:30）。この時代に戦線はイラクや歴史的シリアにまで広がり、続くウマルの時代には歴史的シリアやササン朝の支配地域も完全に手に入れたのであった（Balci 2011:309）。

アブー・バクルの治世はわずか2年ほどであり、彼は死に際して、後継者としてウマルを指名した。ウマルの10年におよぶ治世により、国家と行政の機構が整備された。ムハンマド時代の国家が原理・原則を定めた理念的な原型であったとすれば、ウマルの時代に具体性を持ったのである。

ウマルは礼拝中に殺されたが、この時点で誰の目にも明らかなウマルに次

ぐ長老が存在しなかった。彼は生前、主要な長老と目される 6 名を任命し、互選でカリフを選ぶように遺言した。このことは、イスラームにおける民主的制度と見なす後世の人々もいる。

この互選により選ばれたのがウスマーンであり、彼の治世は 12 年に及んだ。彼は自分の出身であるウマイヤ家の者を登用した。ウマルによってシリア総督に任命されたムアーウィアはウマイヤ家の一員としてウスマーンにも重用された。後にムアーウィアはウマイヤ朝を開くことになるが、結果として、ウスマーンがウマイヤ朝成立を準備したことになる。しかしウスマーンがコーランの正典化をしたことにより、イスラーム史に大きな貢献をした側面も忘れてはならないのである（小杉 2011:170-183）。

ウスマーンの治世末期から社会的混乱が激しくなり、彼も殺害された。彼の死去によって、残る指導者はアリーだけとなり、4 代目カリフとなった。しかしムアーウィアはアリーの就任に納得しなかった。またムハンマドの妻であったアーイシャやムハンマドの直弟子たちとアリーは戦うことになった。アリーの 5 年に満たない治世は内乱・混沌の時期であった。アリー自身も暗殺者の手にかかって生涯を終えることになり、四代正統カリフ時代が終焉することになる。その後、ムアーウィアがカリフに就任した。長い内戦に倦んでいた人々は新しいカリフを承認し、ムスリム全体の安定と統一を望んだ。ここにウマイヤ朝が始まることとなる（小杉 2006:172-179、Esposito 1999=2005:37）。

6. 諸王朝の歴史

ウマイヤ朝に対して、後世の人々による批判が存在する。その原因の一つは正統カリフ時代を終わらせ、その時代の理想に反する権力政治を展開した点にある。しかし正統カリフ時代に起きた大征服とそれに伴う巨大な政治・経済・社会的な変容は、メディナの都市共同体を支えていた原理と制度では吸収できない水準に達していた。正統カリフ制の終焉は不可避であった側面も有していたのである。

ダマスカスが都であったウマイヤ朝はアラブ人中心の「アラブ帝国」、後

に成立したバグダードが都であったアッバース朝(750-1258年)は「イスラーム帝国」と称される。またウマイヤ朝の人口構成では、ムスリムは少数であり、多くはキリスト教徒であった。

ウマイヤ朝では各地域が一定の自立性を有していたのに対して、アッバース朝では中央集権化が高度に進んだ。アッバース朝第2代カリフ、マンスール(在位754-775)の治世で、軍事組織の確立、新都バグダードの建設、行政機構の整備、財政の確立などを成し遂げ、王朝の体制を盤石なものとした(小杉 2011:198-231)。またイスラームにおける主流派がスンナ派と呼ばれるようになったのもアッバース朝の時代であり、この時代に主流派は固有の名前を有する一つの宗派として定着した(Ansary 2009=2011:180)。

アッバース朝の後、エジプトを中心にファーティマ、アイユーブ、マムルーク朝などが、イラク地域にはブワイフ朝、イラン地方においてセルジューク朝などが台頭した。

諸王朝の台頭とともに、イスラーム文化も花開いた。イスラーム文化が発達した要因として次のことが考えられよう(佐藤 1997:168-169)。ギリシア文明、イラン文明、インド文明を継承するのに好都合なイスラーム世界の位置、砂漠から移住したアラブ人の旺盛な知的好奇心、イスラームとアラビア語の活力、カリフや富裕な商人による文化活動の保護、安価な紙の普及による知識の幅広い伝達などである。

7-10世紀はイスラーム帝国の首都がメディナ、ダマスカス、バグダードに置かれ、アラブ人のカリフが治めるカリフ制の時代であった。次に地方王朝が確立し、軍人の統治者が勃興し、移行期となる。つまり正統性を重視するカリフ制から実権制へと、国家と権力の実態が変化していく。そして13世紀半ばにカリフ制国家が終焉を迎えると、名実ともに実権制の時代になる。統治者たちの民族的な出自も、トルコ系、チュルク系、モンゴル系など多様化する(小杉 2011:435-436)。

その後、オスマン朝(1299-1922年)が成立し、イスラーム帝国最大の版図に達し、600年以上に渡り、オスマンの平和がもたらされることになるのである。

おわりに

イスラームはムハンマド亡き後も、様々な危機を乗り越えて急速に拡大した。

イスラームは六信五行を基本としながら、時代や状況に合わせ対応した。シンプルな教義、教会や聖職者は理念上存在せず、直接ひとりひとりがアッラーと向き合うのである。イスラームにおける流動性・商業性・国際性により宗教的寛容性が醸成され、イスラーム・ネットワークが張りめぐらされ、国際交易が栄えた。

カリフとは預言者の代理人であり、預言者の持つ政治的な権限を継承した者である。四代正統カリフ時代には混乱も生じたが、国家の機構が整備され、コーランの正典化も行われた。その後、ウマイヤ、アッバース、セルジューク朝などが興り、イスラーム文化が花開き、最後のイスラーム帝国であるオスマン帝国のもと、オスマンの平和がもたらされるのである。

引用文献

- Ansary, Tamim, 2009, *Destiny Disrupted: A History of the World*, Public Affairs. (=2011, 小沢千重子訳『イスラームから見た「世界史」』紀伊國屋書店。)
- Balcı, İsrail, 2011, *İlk İslam Fetihleri Savaş - Barış İlişkisi*, Pınar Yayınları.
- Esposito, John ed., 1999, *The Oxford History of Islam*, Oxford University Press. (=2005, 小田切勝子訳『オックスフォード イスラームの歴史1 新文明の淵源』共同通信社。)
- Ünlü, Nuri, 2014, *İslam Tarihi 1 (Başlangıçtan Osmanlılara Kadar)*, 4 Baskı, Marmara Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Vakfı Yayınları.
- 板垣雄三他編, 1986,『概説イスラーム史』有斐閣。
- 大塚和夫, 2002,「六信五行」片倉ともこ他編『イスラーム世界事典』明石書店, 393-394。
- 加藤博, 1995,『文明としてのイスラム』東京大学出版会。
- , 1999,『イスラム世界の常識と非常識』淡交社。
- 小杉泰, 2006,『イスラーム帝国のジハード』講談社。

- , 2011, 『イスラーム文明と国家の形成』 京都大学学術出版会。
- 佐藤次高, 1997, 『世界の歴史 8 イスラーム世界の興隆』 中央公論社。
- , 2004, 『イスラームの国家と王権』 岩波書店。
- 塩尻和子, 2007, 『イスラームを学ぼう 実りある宗教対話のために』 秋山書店。
- 藤本勝次編, 1979, 『コーラン 世界の名著 17』 中央公論社。
- 矢島彦一, 2003, 『イブン・バットゥータの世界大旅行』 平凡社。